

『外国語で国際体験』を終えて

(ジャカルタ 海外ボランティア)



私が初めてボランティアに興味を持ったきっかけは、愛知万博の赤十字館で地雷の展示を見て衝撃を受けたことだった。その後、日蓮宗名古屋青年会による、カンボジアの地雷撤去を目的とした募金活動に参加し、中学2年の時初めてカンボジアを訪れ、地雷で手足を失った子どもたちを目の当たりにし、ただひたすら涙が止まらなかったことを覚えている。その時私は、大人になったら、何か少しでもこの子たちの役に立つことをしていきたいと強く思った。そして大学1年の夏、フィリピンでの学校建設ボランティア、また春にはカンボジアでのスタディーツアーに参加し、東南アジアの現状を自分の目で見て学んできた。



今年の2月にスタディーツアーでカンボジアの小学校へ行った時、印象に残る出来事があった。それは、毎日学校に遊びに来る制服を着ていない男の子のことだ。話を聞いてみると、聴覚の障がいをもっているという。彼は学校で授業を受けさせてもらえない、休憩時間に遊んでいる生徒たちの輪に入ることもできずにいた。さらに驚いたことに、子どもだけではなく、先生などの大人からも嫌な事を言われ、いじめられていた。

「この子はずっと学校に通えないのかな。どうしてこんな仕打ちを受けなければならないのだろう？」とその時私は何もわからず、ただ心にもやもやだけが残った。

帰国後もその男の子の屈託ない笑顔が忘れられず、今の自分にできることはないだろうかと思いインターネットで調べてみた。そしてインドネシアにはたくさんのボランティア団体があることを知り、その中の1つ、J2netという団体に連絡をとった。すると視覚聴覚知的障がい学校、ストリートチルドレン保護更生施設でボランティア活動ができるといわれ、連れて行ってもらう約束をとることができた。

そこでこの『外国語で国際体験』に申し込み、8月28日から9月5日までの9日間、インドネシアの西ジャカルタにある蓮華寺にホームステイさせていただきながらボランティア活動に参加させてもらうことにした。

学校に到着すると、先生方が私たちボランティアをある部屋へ連れてていってくれた。ここに通う生徒たちは、将来自分たちで自立して生計を立てていくために、いろいろなものを制作して販売しているというのだ。どれも空き箱や包装紙などの再利用で、子どもが作ったとは思えないほど丁寧な作りのものばかりだった。私は作った子どもたちが喜んでいる姿を想像しながら、ここでの出会いを忘れないようにと、コーヒーの包装紙で作ったカバンを1つ購入した。



エルフィナさんと障がい学校にて

その後、この学校で働く先生にカンボジアでの出来事を話し、ジャカルタでの障がいに対する現状について質問してみた。ここジャカルタでは障がいに対する偏見はなく、普通学級に無理に通わせずにこういった学校で学ばせてあげることが大切だと考えているため、ここ以外にも障がいのための学校はいくつかあるそう

だ。この学校は富裕層が寄付をしているため、授業料も安く通うことができるという。先生たち大人が障がいに対して偏見のない認識をもって教育している現状がみえた。しかしこの時私はまだ、富裕層という言葉に実感がわからずについた。



ボランティアの様子



ストリートチルドレン保護更生施設の制作所



次に、「ツチ」というボランティア団体に所属する蓮華寺さんの信者さん、ハリムさんアファットさんにボランティア活動へ同行させていただいた。集合場所に着くと、学生からお年寄りまで、たいへん多くのボランティアが集まっており、とても驚いた。今回私が参加させていただいた「ツチ」は、日本でも震災復興に協力しており、世界各国でボランティア活動している団体だ。活動拠点の中でもここインドネシアは最も重点を置く国のひとつで、スマトラ沖地震の際には仮設住宅を大量に建設し、当時の大統領から直接感謝されるほど大々的な活動を行っているのだという。それ以降も貧困者が通えるよう医療費を安くした病院、学校の建設など、多岐にわたる活動をしているそうだ。

「ツチは仏教のお坊さんが始めた団体だけど、私はキリスト教徒よ。来ているボランティアは信仰している宗教もバラバラだし、そんなことは関係なく、参加したいと思った人が参加すればいい。私は近所に住んでいるから一度来てみようと思って、今回が初参加。」と話しかけてくれた女性と同じ班になり、滞在中お世話になっていたハリムさんとアファットさんに加え、今回は4人で活動することに決まった。

今回私が参加させてもらう活動は、事前調査により選ばれた貧しい家庭を1軒ずつ訪問し、お米20kgの配給券を手渡すというボランティアだ。狭い路地。やせ細った鶏。ギラギラと照りつける日差しの中、土とゴミにまみれた道を4人で黙々と歩いた。最初の家に到着すると、伝統衣装に身を包んだ女性が出てきた。家の中を覗き、経済状況を確認し、配給券を手渡してサインを求める。しかし、女性は戸惑ったようにペンを受け取ろうとしない。字が書けないのだという。他にも、子どもしかいない家もあった。扉を開けると、小さな姉がもっと小さな妹を抱き、警戒したように私たちを睨んでいた。両親は共働きで家にいないのだという。様々な家庭があったが、どの家庭でも、支援がないと生活していくけないことを家族全員がわかっていて、受け取った配給券を安堵の表情で見つめる姿が印象的だった。



配給券と住所リスト



9月7日には今回の配給券をもとに、実際にお米を配給する活動があるという。その日までいられないことは残念だったが、日本では体験ができない活動に参加させてもらい、現地の様子を直接肌で感じることができたことは大変いい経験になった。日本からのボランティアツアーで訪れる地区は、本当の貧困層が住む場所ではないようだ。よく、「どんなにお金がなくても、子どもたちはいつも笑顔で幸せそうだった。」なんて聞くけど、本当にいる人たちは、そんなに笑わないから。現地のボランティア団体だからこそ、本当に必要な支援ができるのだと改めて痛感した。



その後もインドネシアの生活を知るため、蓮華寺の信者さんであるシリンさん一家に様々な場所に連れて行っていただいた。中でも驚いたのは、インターナショナル幼稚園、大きなショッピングモールなどが立ち並ぶ高級住宅街。プライベートプールやゴルフ場が家に隣接しており、屋根の上には太陽光発電まで設置してあった。今まで見たことがない夢のような豪邸の数々に私は思わずため息がもれた。車を運転していたシリンさんが「ジャカルタのお金持ちは際限なくお金持ち。反対に貧困で苦しんでいる人もいる。でもお金持ちはこういった現状をわかっていて、自分から進んで寄付をする人ばかり。ジャカルタにボランティア団体が多いのは、富裕層のおかげだと思う。」と教えてくれた。障がい学校の先生が言っていた言葉をその時やっと理解できたような気がした。自分たちで自分たちの国のこと理解し、問題を解決していくとしているのだ。



インターナショナル幼稚園

私はふと、スタディーツアーでカンボジアを訪れた時、上智大学の先生がおっしゃっていた「カンボジアの人は他国の人があつまでも助けてくれると思っていて、自分から何もしようとしてない。」という話を思い出した。諸外国が途上国に対して、ただお金をあげたり、施設を作りあげたりすることが本当の支援とはいえない。あつまでも他国に頼るのではなく、自国のこと自国で解決できるようにしなければ、今後の発展は見込めない。

今回ジャカルタの障がい学校やストリートチルドレン保護更生施設に共通して見られたものは、自力で生きていくために様々な技術を習得させる教育だった。これこそが、本当の意味で大切な支援なのだと思う。

また、今回参加したようなボランティアの活動資金や施設の運営費の多くは富裕層から支払われる寄付金でまかなわれているという実情もはじめて知った。貧富の差を頭ごなしに批判するのではなく、富をうまく分け合って助け合って生活していくことも解決のひとつなのではないかと、新しい考えを持つことができた。

こんなちっぽけな私1人が現地に行ったところで何も助けになることはないだろう。けれど、私が見てきたものを伝えることで多くの人が関心をもってくれたら、何か変わるかもしれない。私は今大学2年生で、就職活動など生涯に係る決断の時が始まる。私は将来、自分の目で見て感じたことを伝えていける人になりたい。より多くの人に自分の知らない世界に目を向けてもらえるような、そんな仕事に就きたいと思う。

最後になりましたが、
すばらしい機会をくださ
った宗務院のみなさん、
滞在先でお世話になった
エルフィナ妙布さん、
ボランティア団体のハリ



蓮華寺のエルフィナさん



シリンさん一家

ムさんアファットさん、
楽しい日常生活を体験させてくださったシリンさん一家、
ご支援ご協力してくださったみなさんに心から感謝します。

